

## 2009年2月の大気大循環と世界の天候

### 大気大循環

海面更正気圧では、シベリア高気圧の発達・南下はほとんど見られず、東アジアへの張り出しはかなり弱かった。500 hPa 高度で見ると、ユーラシア大陸南部は帯状に正偏差が分布し、対応する対流圏下層の高温偏差が明瞭に見られた。特に、シベリア高気圧の張り出しが弱かった華南から沖縄・奄美にかけては顕著な高温偏差となった。アリューシャンの南海上ではリッジの発達が顕著で、射出された準定常ロスビー波束が中米、北大西洋へと到る波列を形成した。正偏差に覆われたメキシコ北部では顕著な高温偏差となった。北半球の亜熱帯ジェットは、高度場偏差に対応して、北アフリカから東アジアにかけて北偏した。また、リッジの発達に対応して日付変更線付近では寒帯前線ジェットの北偏が見られた。ストームトラック域における高周波擾乱の活動は、北太平洋では平年より北偏、北大西洋では東偏した。1月に発生した成層圏大規模突然昇温は、2月中旬に終息した。

熱帯域の対流活動は、東南アジア域で平年よりも活発だった。一方、中部太平洋赤道域では平年よりも不活発だった。これらの対流活動偏差に対応して、対流圏下層の太平洋赤道域では広く東風偏差となり、特に西部の偏差が顕著だった。対流圏上層には日付変更線付近に赤道対称な低気圧性循環偏差の対が見られ、中

部太平洋赤道域の西風偏差は2009年1月に比べて強くなった。熱帯域の海面更正気圧は、中部太平洋域で高気圧偏差、その他の領域で低気圧偏差となり、南方振動指数の値は+1.3だった。赤道季節内振動 (MJO) に伴う対流活動が活発な領域は、2月上旬にインドネシア付近を東進したが、その後は不明瞭となった。

### 世界の天候

2009年2月の世界の月平均気温平年差は、+0.24°Cで、1891年の統計開始以来、7番目に高い値となった。2月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は0.76°C/100年である。

○西日本からアラビア半島にかけての広い範囲で異常高温となった。

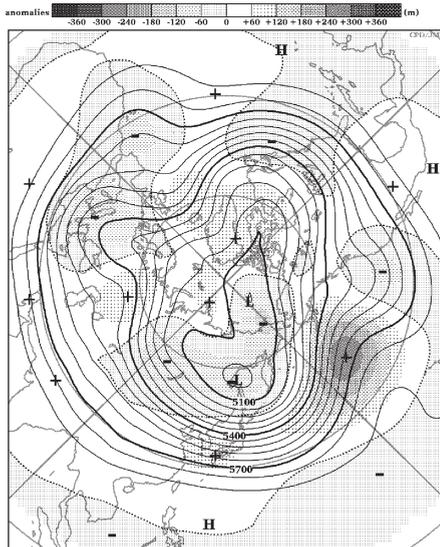
○米国東部と南部では異常少雨となった。

○オーストラリア南東部で大規模な森林火災により170人以上が死亡したと伝えられた (オーストラリア政府による)。

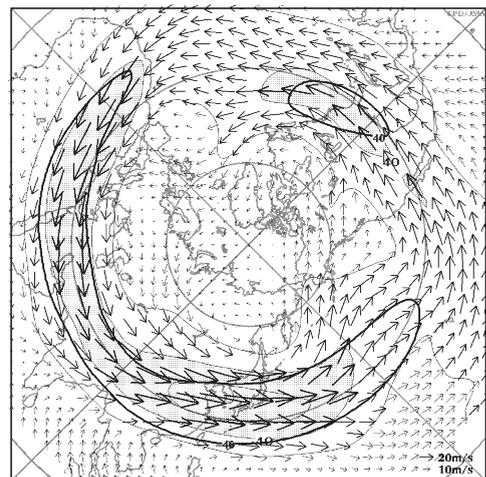
(気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課)

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

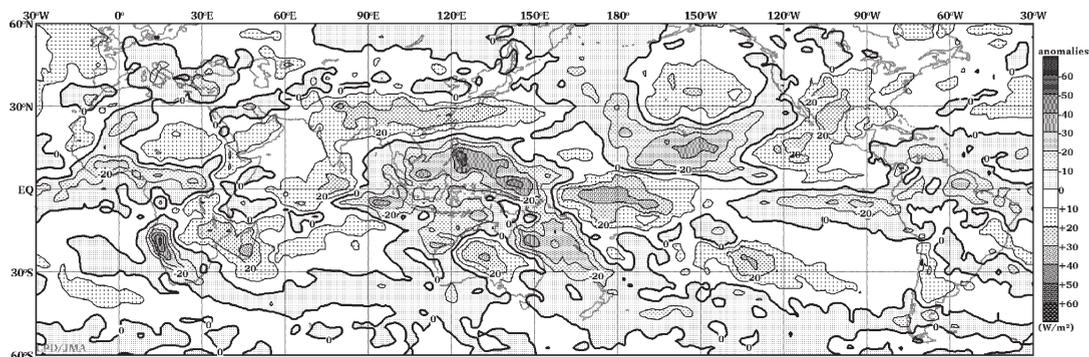
<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



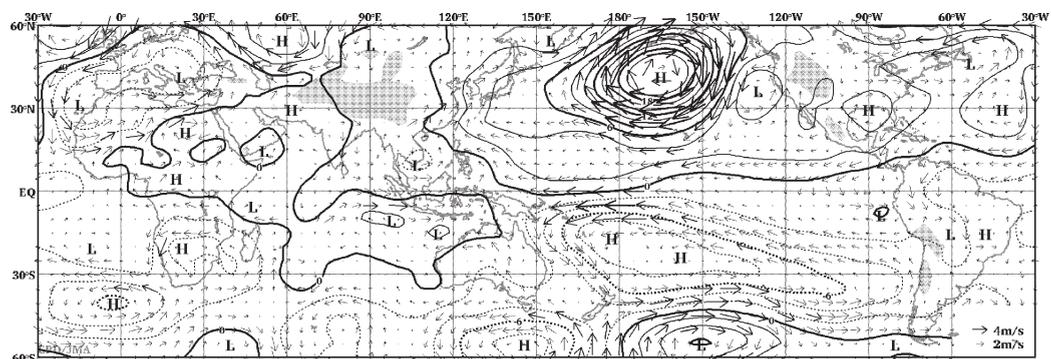
2009年2月の北半球月平均500 hPa 高度および平年偏差  
等値線間隔は60 m。陰影は平年偏差。平年値は1979~2004年のデータから作成。



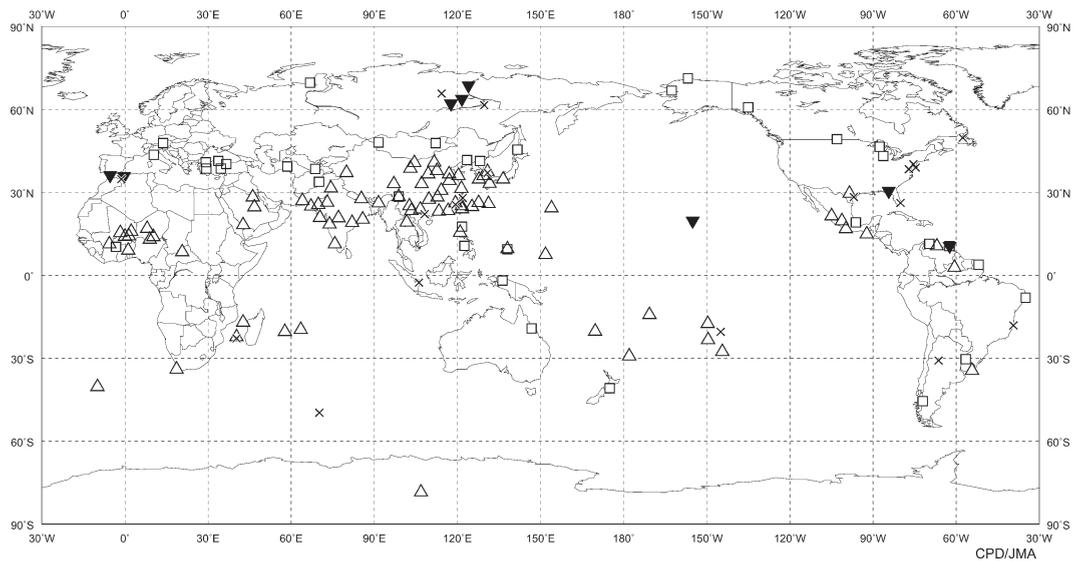
2009年2月の北半球月平均200 hPa 風速および風ベクトル  
等値線間隔は20 m/s。陰影部は40 m/s以上。太実線で囲まれた領域は平年の40 m/s以上の領域を示す。平年値は1979~2004年のデータから作成。



2009年2月の月平均外向き長波放射量年偏差  
 等値線間隔は10 W/m<sup>2</sup>で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。元データはNOAA。年偏差は1979~2004年のデータから作成。



2009年2月の月平均850 hPa 流線関数年偏差および風年偏差ベクトル  
 流線関数の偏差の等値線間隔は  $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1979~2004年のデータから作成。



2009年2月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨  
 異常高温・低温は標準偏差の1.83倍以上，異常多雨・少雨は降水5分位値が6および0。